

なほざりに思ひしことも年をへて おもひかへせばこ
ひしかりけり

174

葦原のみづほの國の萬代も みだれぬ道は神ぞひらき
し

くろがねの的いし人もあるものを つらぬきとほせ大
和だましひ

175

秋の夜の長きを何にかこつらむ なすべき事の多くあ
る世に

わが心こころいたらぬくまのなくもがな　このよをてらす月つき
のごとくに

菊きくのはな机つくえのうへにさしてみむ　そのふに遊あそぶいとま
なければ

さしのぼる朝あさ日ひのごとくさわやかに　もたまほしきは
心こころなりけり

よきをとりあしきをすて、外と國くにに　おとらぬ國くにとなす
よしもがな

檀原かしはらのとほつみおやの宮柱みやはしら たてそめしより國くにはうご

かず

178

あらし吹く世よにも動くな人ひとごころ いはほに根ねざす松まつ
のごとくに

世よの中なかにひとりたつまでをさめえし 業わざこそ人ひとのたか
らなりけれ

179

かたしとて思おもひたゆまばなにごとも なることあらじ
人ひとのよの中なか

ひろき世にたつべき人は數ならぬ ことに心をくだか
さらなむ

ふむことのなかたからむ早くより 神のひらきし敷

島の道

野末まで種をまかなむ教草 いまだしげらぬ方もこそ

あれ

たゞしくも生ひしげらせよ教草 をとこをみな道の
別ちて

ことなしとゆるぶ心こころはなかくに 仇あだあるよりもあや
ふかりけり

182

ともすれば思おもはぬ方かたにうつるかな ころすべきは心こころ
なりけり

世よわたりの道みちのつとめに怠おこたるな 心こころにかなふあそびあ
りとも

183

なりはひをたのしむ民たみのよろこびは やがてもおのが
よろこびにして

まじはりをむすぶ國々よろこびを いひかはす世ぞ嬉
しかりける

いつくしみあまねかりせばもろこしの 野にふす虎も
なつかざらめや

身にあまるおも荷なりとも國の爲 人のためにはいと
はざらなむ

おのが身はかへりみずして人のため 盡すぞひとの務
なりける

鬼神おにがみもなかするものは世よの中なかの 人ひとのこゝろのまこと
なりけり

天あめをうらみ人ひとをとがむることもあらず わがあやまち
を思おもひかへさば

いたづらに時ときを移うつしてことしあれば あわたゞしくも
たちさわぐかな

あまた度たび通かよひなるれば遙はるかなる 道みちも遠とほしと思おもはざり
けり

國民がこゝろづくに進みゆく 道にはさはるものなく
もがな

ならび行く人にはよしやおくるとも たゞしき道をふ
みなたがへそ

おごそかにたまたざらめや神代より うけつぎ來たる
うらやすの國

吳竹の世々につたへて仰ぐかな 遠つ御祖のみことの
りぶみ

みじかくてことの心こころのとほりたる 人のふみこそ讀よみ
よかりけれ

きゝしるはいつの世よならむ敷島しきしまの やまと詞ことばの高たかきし
らべを

あまてらす神かみのさづけしたからこそ 動かぬ國くにのしづ
めなりけれ

人ひとみなのをらびしうへにえらびたる 玉たまにもきずのあ
る世よなりけれ

寶^{たから}ともいふべき玉^{たま}はなくならむ　こまかに瑕^{きず}をもとめ
いでなば

192

しら玉^{たま}を光^{ひかり}なしともおもふかな　磨^あきたらざること
を
忘れて

世^よの中^{なか}の人^{ひと}のかゞみとなる人^{ひと}の　おほくいでなむわが

日^ひの本^{もと}に

くつがへることこそあれ小車^{せぐるま}の　進^{すす}むにのみはまか
せざらなむ

193

をさめしる國のはてまでしらせばや 民安かれと思ふ
ころを

むらぎもの心にたえずおもふこと なしとげし日ぞう
れしかりける

おのが身はかへりみずしてともすれば 人のうへのみ
いふ世なりけり

あかつきのねざめくくに思ふかな 國に盡しゝ人のい
さをを

をちこちにわかれすみても國を思ふ 人の心ぞひとつ
なりける

をさな子にひとしくなれる老人を いたはることをゆ
るかせにすな

おとろへしさまは見えねどおいびとの 涙もろくもな
りまさりぬる

からくして歩みはじめし人の子の ひとりたつ身とい
つかなりなむ

ならびたつたけはひとしく見えながら　このかみは猶
このかみにして

外國とらくににおとらぬものを造つくるまで　たくみの業わざにはげめ
もろ人ひと

海うみこえてはるく來きつる客人まらうとに　わが山水さんすゐのけしき見
せばや

わがしれる野のにも山やまにもしげらせよ　神かみながらなる道みち
をしへぐさ

ひろき世にまじはりながらともすれば 狭くなりゆく
人ごゝろかな

たらちねの親のみまへにありとみし 夢のをしくも覺
めにけるかな

いにしへは夢とすぐれどまことある 臣のことばゝ耳
にのこれり

わが爲に心つくして老人が をしへしことは今もわす
れず

わが國は神のすゑなり神祭る
昔の手ぶり忘るなよゆ
め

とこしへに國まもります天地の
神の祭をおろそかに
すな

あまてらす神の御光ありてこそ
わが日のもとほくも
らざりけれ

萬民こゝろあはせて守るなる
國にたつ身ぞ嬉しかり
ける

ちよろづの民たみの心こころををさむるも　いつくしみこそ基もとなりけれ

204

まめやかにつかふる臣おみのあればこそ　わがまつりごと
みだれざりけれ

千萬ちよろづの民たみと共ともにもたのしむに　ます樂たのしみはあらじとぞおもふ

205

さだめたる國くにのおきてはいにしへの　聖ひじりの君きみのみこそ
なりけれ

さまざまの世のたのしみも言のはの道みちのうへにはた
つものぞなき

ものごとに進すすまずとのみ思おもふかな身みのおこたりはか
へりみずして

きくたびにゆかしきものはまつりごと正ただしき國くにの姿すがた
なりけり

敷島しきしまのやまとしまねのをしへぐさ神代かみよのたねの残のこる
なりけり

思ふことなるにつけてもしのぶかな もとる定めし人
のいさをを

みちくにつとめいそしむ國民の 身をすくよかにあ
らせてしかな

ひと筋をふみて思へばちはやぶる 神代の道もとほか
らぬかな

おもふこと思ひ定めて後にこそ 人にはかくといふべ
かりけれ

天つ神定めたまひし國なれば わがくにながらたふと
かりけり

210

世はいかに開けゆくともいにしへの 國のおきてはた
がへざらなむ

千萬のたみのちからを集めてぞ 國はゆたかになすべ
かりける

211

鏡にはうつらぬ人のまごゝろも さやかに見ゆる水莖
のあと

よむふみのうへに涙なみだをおとしけり 昔むかしの御代みよのあとを
しのびて

いつはらぬ神かみのこゝろをうつせみの 世よの人ひとみなにう
つしてしがな

きくにまづ身みにぞしみける誠まことより いふことのは長なが
からねども

思おもふこといふべき時ときにいひてこそ 人ひとのこゝろもつら
ぬきにけれ

たらちねの親おやのをしへは誰たれもみな 世よにあるかぎり忘わすれざらなむ

まごゝろをこめてならひし業わざのみは 年としを経かれどもわすれざりけり

教草ましへぐさしげりゆく世よにたれしかも あらぬ心こころの種たねをまきけむ

むらぎもの心こころのかぎりつくしてむ わが思おもふことなりもならずも

まつりごとき、をはりたるゆふべこそ　おのが花みる
時にはありけれ

ともすればさまたげられて一筋に　ゆかれぬものは道
にぞありける

人の世のたゞしき道をひらかなむ　虎のすむてふのべ
のはてまで

き、しより遠くと思ふはゆくさきに　心のいそぐ道に
ぞありける

まつりごとよこしまならぬ國にこそ さかしき人も多
くいでけれ

218

かりそめの事に心をうごかすな 家の柱とたてらるゝ
身は

親のゆくあとをしたひてひな鶴も 庭のをしへやふみ
はじむらむ

219

よきたねをえらびくゝて教草 うゑひろめなむのにも
やまにも

いかならむことある時もうつせみの
人の心よゆたか
ならなむ

いにしへの姿のまゝにあらためぬ
神のやしろぞたふ
とかりける

いとまなき世にはたつともたらちねの
親につかふる
道な忘れそ

心からそこなふことのなくもがな
親のかたみと思ふ
べき身を

敷島しきしまのやまと心こころをみがけ人ひと　いま世よの中なかに事ことはなくと

も

思おもはざることのおこりて世よの中なかは　心こころのやすむ時ときな

りけり

身みをすてゝいさをたてし人ひとの名なは　國くにのほまれと共とも
にのこさむ

國民くにとみの業わざにいそしむ世よの中なかを　見みるにまさされる樂たのしみはな

し

あやまたむこともこそあれ世の中は
あまりにもものを
思ひすぐさば

開くべき道はひらきてかみつ代の
國のすがたを忘れ
さらなむ

くにを思ふ臣のまことは言のはの
うへにあふれてき
こえけるかた

しる人の世にあるほどに定めてむ
ふるきにならふ宮
のおきてを

敷島しきしまのやまと心こころをうるはしく うたひあぐべきことの
はもがな

なすことのなくて終まはらば世よに長ながき よはひをたもつか
ひやなからむ

世よを治さめ人ひとをめぐまば天地あめつちの ともに久ひさしくあるべか
りけり

就喝

印

幸一

印

印

天長節

今日の吉き日は、大君の

うまれたまひし吉き日なり。

今日の吉き日は、御ひかりの

さし出たまひし 吉き日なり。

ひかり遍き 君が代を

いはへ、諸人 もろともに。

めぐみ遍き 君が代を

いはへ、諸人 もろともに。

君が代

君が代は 千代に八千代に

さざれ石の

巖となりて 苔のむすまで

勅語奉答

あやに畏かしこき 天皇すめらみの

あやに尊たふとき 天皇すめらみの

あやに尊たふとく 畏かしこくも

下くだし賜たまへり 大勅語おほみこと

是これぞめでたき 日ひの本もとの

國くにの教をしへの 基もとなる

是これぞめでたき 日ひの本もとの

人ひとの教をしへの 鑑かたみなる

あやに畏かしこき 天皇すめらみの

勅語みことごのまゝに 勤いそみて

あやに尊たごとき 天皇すめらみの

大御心おほみこころに 答こたへまつらん

紀元節

雲くもに聳そびゆる高千穂たかちほの

高根たかねおろしに、草くさも木きも、

なびきふしけん大御代おほみよを

仰ぐ今日こそ樂しけれ。

海原なせる埴安の

池のおもより猶ひろき

めぐみの波に浴みし世を

仰ぐ今日こそ樂しけれ。

天津ひつぎの高みくら、

千代よろづよに動きなき

もとる定めしそのかみを

仰ぐ今日こそ樂しけれ。

空にかがやく日のもとの、
萬の國にたぐひなき
國のみはしらたてし世を
仰ぐ今日こそ樂しけれ、

明治節

アジヤの東日出づる處、
聖の君の現れまして、
古き天地とさせる霧を、

大御光おほみひかりに限くまなくはらひ、
教をしへあまねく、道明みちあきらけく、
治をさめたまへる御代尊みよたかみ。

惠めぐみの波なみは八洲やしまの餘あまり、
御稜威みいづつの風かぜは海原うなばら越えて、

神かみの依よさせる御業みわざを弘ひろめ、
民たみの榮さか行く力ちからを展のばし、
外とつ國國くにくにの史ふみにも、著しるく、
留とどめたまへる御名畏みなかしこ。

秋あきの空そらすみ、菊きくの香かほ高たかき、

今日けふのよき日ひを皆みなことほぎて、

定めさだましける御憲みのりを崇あがめ、

諭さとしましける詔勅みことを守まもり、

代々よよ木の森もりの代代よよ長とこしへに

仰おほぎまつらん、大帝おほみかど。

海うみゆかば

海行うみやゆかば 水漬みづくかばね

山行やまゆかば 草くさむすかばね

大皇おほみかみの

邊へにこそ死しなめ

かへりみは せじ

金剛石

金剛石こんがうせきも みがかずば

珠たまのひかりは そはざらむ

人ひともまなびて のちにこそ

まことの徳は あらはるれ
時計のはりの たえまなく
めぐるがごとく 時のまも
日かげをしみて はげみなば
いかなるわざか ならざらむ

水は器

水はうつはに したがひて
そのさまぐくに なりぬなり
人はまじはる 友により

よきにあしきに うつるなり
おのれにまさる よき友を
えらびもとめて もろ共に
こゝろの駒に むちうちて
まなびの道に すゝめかし。

愛國行進曲

見よ 東海の 空明けて

旭日高く 輝けば

天地の正氣 潑刺と

希望は躍る 大八洲

お、 清朗の 朝雲に

聳ゆる 富士の姿こそ

金甌無缺 搖ぎなき

我が日本の 誇なれ

起て 一系の 大君を

光と 永久に戴きて

臣民我等 皆共に

御稜威に副はん 大使命

往け 八紘を 宇となし

四海よっかいの人ひとを 導まもきて

正ただしき平和へいわ うち建たてん

理り想きょうは 花はなと咲さき薫かほる

いま 幾いく度たびか 我わがが上うへに

試し錬れんの嵐あらし 哮たぎるとも

斷た乎こと守まもれ その正せい義ぎ
進ままん道みちは 一いっつのみ

あゝ 悠い遠まんの 神かみ代より

轟とどろく歩ほ調てう うけつぎて

大だい行かう進しんの 往ゆく彼かなた方た

皇國くわうこくつねに 榮さかえあれ

仰かよげば尊たふとし

一

仰かよげば尊たふとし わが師しの恩おん
教をしへの庭にはにも はやいくとせ

おもへばいと疾し　このとし月
今こそわかれめ　いざさらば

二

互にむつみし　日ごろの恩
別るる後にも　やよ忘るな
身をたて名をあげ　やよ勵めよ

今こそわかれめ　いざさらば

螢の光

螢ほたるの光ひかりまどの雪ゆき

文ふみよ讀よむ月つき日ひ重かさねつゝ

いつしか年としもすぎのとなを

あけてぞ今朝けさは別わかれゆく

とまるもゆくもかぎりとして

かたみにおもふ千ちよ萬ろの

心こころのはしをひとごと

幸さいくとばかり歌うたふなり

つくしのきはみ陸の奥
うみやま遠くへだつとも
その眞心はへだてなく
ひとつにつくせ國のため

臺灣のはても樺太も
やしまのうちのみもりなり
いたらん國にいさをしく
つとめよわかせ恙なく

億兆一心
皇謨翼贊

昭和十四年十月二十八日印刷
昭和十四年十一月三日發行

定價 壹圓六拾錢・六錢

不許
複製



編輯者 佐田 八郎
發行所 東京市本郷區金助町二九
印刷者 杉 眞 一
印刷所 東京市本郷區金助町二九
日興舍印刷所

發行所

東京市世田谷區
世田谷三ノ二二四

皇道顯揚會天照閣

振替口座東京一四八四八六

394

184

終

